



にぎわった昨年の「おおいたみのりフェスタ」―別府市の別府公園で

実りの秋を迎えた。大分県が誇る山と海の幸を堪能し、さまざまな催しを通して自然の恩恵に感謝する2日間にした。毎秋恒例の県農林水産祭「おおいたみのりフェスタ」が、18日から、別府市の別府公園で開かれる。

消費者と生産者の触れ合いを通じ、県産農林水産物の素晴らしさを農山漁村の魅力を発信する年に一度の官民一大イベントだ。半世紀近くも続いており、今年も農林、水産の両部門を合同で開催する。

多彩な直販やグルメを満喫するだけでなく、私たちの「食」を支える大事ななりわいと誇りを次代へどうつなげていくべきか。県内の第1次産業の現状を知り、考えを巡らせる場になればならない。言うまでもなく、大分県の農林水産業は多様な恵みに支えられている。しかしながら全国同様、県内も高齢化や後継者不足は深刻さを増し、持続可能な第1次産業の在り方は喫緊の課題になっている。

論説

2025.10.17

おおいたみのりフェスタ



県や農水省によると、2020年の県内就農者は約2万1500人で、10年前の約3万4千人から4割近く約1万3千人も減っている。しかも全体の8割弱は65歳以上の高齢者だ。耕作放棄地も拡大傾向にある。林業も厳しい。23年の産出額は210億円で前年から22億円

明るい話題もある。県内の農林水産業への新規就業者は昨年度472人を数え、令和になつてから最多となった。ドローンやAIなどスマート技術の導入も進み、若手を中心に新しい「挑戦」が伝統の上に芽吹きつつある。

みのりフェスタは、そうした

山と海の「恵み」堪能したい

減少した。人手不足や作業費の高騰で、伐採期を迎えているものの手つかずの人工林は多い。漁業も例外ではない。23年の就業者は約2500人で、産出額(348億円)は前年比で11%(43億円)の減だ。そこに燃料費や餌代の高騰が追い打ちをかける。

県農業の「いま」を自分の目で見て考え、安心・安全を味わい、一県民として生産者をその場で支援できる貴重な機会だ。

昨年は2日間で7万1千人が来場した。会場は各地の産地直売ブースが並び、郷土料理の屋台や各種体験コーナーなどが連なる。生産者は消費者と「顔が

見える関係」を築き、そのにぎわいや交流によって業界への新規参入を促す好機にしたい。

県は昨秋に農林水産業振興計画「おおいた農林水産業元気づくりビジョン2024」を策定、今後10年間の指針を示した。地域をけん引する担い手を育て、収益性の高い産地を育むのが狙いだ。豊かな「実り」は自然の恵みだけでは生まれない。ぜひともフェスタに足を運び、大分県の未来を担う生産者たちの背中を押していただきたい。



〔問①〕 記事では、県内の農業、林業、魚業の課題を指摘しています。どのような課題があるのか、それぞれ記事を読んでできる限り全て答えましょう。

・ 農業の課題

・ 林業の課題

・ 魚業の課題

〔問②〕 記事では、明るい話題についても指摘していますが、それは何でしょうか。答えましょう（複数回答可）。

〔問③〕 将来に向けて、若い皆さんが県内の農林水産業を盛り上げていくためにできることは何でしょうか。あなたの考えたことを書いてみましょう。また、周りの人とも意見交換してみましょう。